



七 大王、うどん竜を倒す

僕は眉をしかめた。

「どうしたんだ？」うどんを食べ終わったパパが心配そうに僕の顔を見る。

「さっきから、お腹の調子がおかしいんだ」

「食べすぎじゃないの」ママはまだうどんをすすっている。

「ちょっと、トイレ」

僕はお店のトイレに駆け込むと、ズボンとパンツを同時に下ろして、便座に座った。

「大王。たたたた、大変です」

便器の中から、突然、大きな声がした。僕はパンツを上げるのも忘れて、慌てて立ち上がる。便器のたまり水には、大王によく似ているが、少し小さい人形が何故だかスコップを持って立っていた。

「どうしたんだ。固体班の隊長」大王は胸ポケットから落ちそうな勢いで乗り出している。

「お腹の中で、うどん竜が暴れています。私たちではかないません。どうかお腹の中にお戻りください」固体班の隊長はそう言うと、疲れ果てたのか、体を大の字にしたまま水に浮かんだ。

「やはりそうか。主がうどんを噛まずに飲み込んでいたので、嫌な予感がしていたんだ。わかった。すぐに行く」

「本当に、僕のお腹の中にうどん竜がいるの？」僕はパンツとズボンが下がったままなのに気付き、恥ずかしくなって、すぐに引き上げた。

「ああ、本当だ。詳しい話は後で説明する。じゃあ、すぐにそっちに行くぞ」大王は胸ポケットの中で、急に屈伸運動をし始めた。

「それでは、お願いします」小さい人形は頭を下げ、願いをたすくかのように、水と共に流れていった。

「口を開けてくれ。できるだけ大きくな」大王が胸ポケットの縁を掴み、顔を出した。

「口を？」僕は不思議に思いながらも、大王に言われるまま、口をあーんと開けた。

「それ」大王は掛け声とともに、胸ポケットからジャンプすると、僕の大きく開けた口の中に飛び込んだ。

えっ。大王を、いや、うんこを飲み込んだ。しまった。急いで喉を押さえ、吐き出そうとするものの、大王、いや、うんこは出てこない。ばっちいけれど、仕方がない。自分のうんこだものなあ。僕は吐き出すことをあきらめた。

「どうしたんだ。もうかかって来ないのか」うどん竜は余裕の笑みを浮かべている。

王子たちは、うどん竜の周りを取り囲んでいるものの、手を出せない状態だ。

「わしがいるぞ」大声が聞こえた。

「大王だ」王子たちは周りを見渡すが、大王の姿は見えない。

「誰だ」うどん竜も首を三百六十度回転させるが、声の主の姿は見えない。

「ここだ、ここだ」声は上からだ。顔を上げる。食道から何かが落ちてきた。そして、うどん竜

の頭に直撃し、首をはがい絞めにした。

「痛い。く、くるしい。放せ」

「放せと言われて、放す奴がいるものか」

もがくうどん竜。更に強く首を絞め続ける大王。白いうどん竜の体がだんだんと赤みを帯びてくる。そして、全身が真っ赤になった。危険信号の兆候だ。うどん竜は白目を剥き、地面に大きな地響きを立てて、倒れてしまった。

「今だ。消化しろ」大王が叫んだ。王子をはじめ、個体班、リキッド班の隊員たちが、スコップやツルハシ、ホースを持って、うどん竜を取り囲んだ。次々と、うどん竜の体を切り刻み、消化栓の中に放り込んでいく。

「ざ、ざ、んねん。もう少し、暴れたかったのに」最後に残ったうどん竜の頭も消化栓の中に放り込まれた。

「大王。ありがとうございます。やはり、大王がいないと、消化活動は無理です」王子はほっとした顔を見せる。

「いや、いや。主がうどんを噛まずに飲み込むのをわしが防いでおれば、こんなことにはならなかった。やはり、疑問に思ったことは後回しにせずに、すぐにやらなければならないなあ」大王は腕を組んで頷いている。

「そうじゃ。まだ、外の世界を見ないといけない」大王の顔が落ちてきた暗闇を見上げる。

「また、戻るんですか」

「ああ。このことを主に話をして、注意しておかないといけないからな。そうしないと、また、うどん竜が現れるかもしれん」

「どうやって戻るんですか。お尻からですか」

「いや。口からだ」

「そんなことできるんですか？」

「わしにいいアイデアがあるんだ。それに主がトイレに行くのを待つよりも、その方が早い」大王は再び屈伸運動を繰り返すと大きくジャンプした。

「さあ。食べ終わったらいくぞ」パパが席を立った。ママも続く。

僕は大王を飲み込んだままだ。でも、もうお腹の痛みはない。大王はうどん竜を倒したのだろうか。このうどん店はセルフサービスなので、食べ終わったうどんの器はトレイに載せて自分で運ぶ。その時、鼻の中が急にむずがゆくなった。誰かが鼻毛を引っ張っているのか。

「はっ、はっくしょん」くしゃみがでた。と、同時に、コップの水が跳ねて僕の顔に掛かった。コップの中には、大王が、僕のうんこがいた。そう、大王が戻ってきたのだ。と言うことは、大王は僕の口の中、喉、胃を往復したことになる。ちょっと気持ち悪いけど、自分のうんこだから仕方がないか。

「ああ、気持ちいい。ひと働きした後の、風呂はいいもんだ」大王はご機嫌だ。こんな様子を誰かに見られたら大変だ。僕はコップの中の大王を急いで指で掴み、ティッシュでくるむと何事もなかったかのように胸ポケットの中に入れた。

「お腹の中はどうだったの？」

僕はおそるおそる大王に尋ねた。ティッシュの白いガウンをまとった大王は「やはり、うどん竜がいたぞ」と平然と答える。

「うどん竜を倒したの？」

「当たり前だ。そうしないと消化できないからな。食べ物をよく噛まないで飲み込むと、お腹の中で怪獣になるんだ。うどんだけじゃないぞ。バナナだって、りんごだって同じだぞ」僕は、バナナ怪獣やりんご怪獣がお腹の中で暴れるのを想像した。

「それでお腹が痛かったんだ」

「そうだ。だから、食べ物は飲み込まないで、できるだけ噛んでくれ。そうしないと、また、別の怪獣が現れるぞ」

「わかったよ。お腹が痛いのはもう嫌だから、気をつけるよ」僕はピンと背筋を伸ばした。トレイを片付ける時、残飯入れに食べ残されたうどんがたくさん溜まっていた。

「あれは？」大王が尋ねる。

「食べ残しだよ」

「あんなに多く残るのか」

「そうだね。一人が一本でも食べ残すと、百人で百本になるからね」

「ふーん。そうか」

「それがどうかしたの？」

「いや。少し気になるけれど・・・」大王の額に皺がより、眉が上がり、目が細まった。